



学校通信

平成29年度 第9号
平成30年 1月 9日
練馬区立開進第三小学校
校長 土屋 信行

とげ

校長 土屋 信行

新年おめでとうございます。旧年中は本校の教育活動に温かいご支援とご協力を賜り、誠に有り難うございました。本年が、子供たち、そして皆様にとりまして素晴らしい年となりますようお祈り申し上げます。

さて、今月は日本の子供・保育研究の先駆者である 倉橋惣三氏（1882～1955）の残した言葉をもとに考えてみたいと思います。

わたしたちの目にとげはないか。わたしたちの言葉にとげはないか。わたしたちの気分にとげはないか。

もとより自分で心づかぬ時のことである。まさかに、心づいてそんなことありようはないが、ちらと光る目、ふと出る言葉、思わず動く気分、自分でも心づかない峻烈しゅんれつはないか。

もとより瞬間のことである。直ぐ気がついて急いで取り直さずにはいないが、しかし、とげはいつでもちょっと刺すものである。そのひと突きが、もう相手の皮膚を破っているものである。

幼児の心の膚はだは、その軟らかい皮膚よりも軟らかい。わたしたちにほんの小さな一つのとげがあっても、直ぐいため傷つけずに措おくまい。

或る朝、幼稚園の垣に薔薇を植えている植木屋と立ち話をしながらその薔薇のとげよりも、自分のとげが気にかかりだしたわたしでもある。

（倉橋惣三『育ての心』より「とげ」）

私がこの「とげ」に出会ったのは、担任時代、20代の頃です。かなりの衝撃を受けたことを今でも覚えています。そして、周りの人に（特に子供に）「とげ」を刺さないように自分なりに気を付けてきたつもりです。しかし、今でもまだまだできていないと感じています。ですから、そんな自分への戒めの気持ちも込めて、今月はこの「とげ」を取り上げました。

子供を指導するとき、その子のためを思い、意識して厳しく叱るというのは、保護者そして教師なら誰にでもあることです。私なりの解釈ですが、それは「とげ」とは違うと思います。「とげ」とは、人がふとした瞬間に見せる「相手に対する冷たさ」ではないでしょうか。普段、甘い態度で接していながら、あるとき急に冷たさを滲ませたなら、誰でもその言動に「とげ」を感じるでしょう。

以前にも書かせていただきましたが、私たち大人が子供に接するとき、温かさと厳しさが必要です。それは、甘さと冷たさではありません。日々の忙しさに追われていると、ふと見失いがちになることですが、「とげ」のない言動を心掛けることを忘れないようにしたいものです。

